2008/08/28

『甲斐ヶ嶺』第 80 号巻頭言

縦横

山道を歩いていると大規模な地表地震断層面を発見することがある。ここはまぎれも無く歴史上大災害があったことを示す遺跡であるが、これが出現する瞬間までは何も予知さなかったという点で「後の祭り」だった。だが、歴史には、まさに今地層が断裂に向かうその始まりにあるような「頂門の一針」という瞬間がある。その一例が敗戦後の巣鴨刑務所の５０センチの壁の内外にあったという（「地獄の日本兵—ニューギニア戦線の真相—」飯田進著（新潮新書））。

１５年戦争期間中の日本軍の無謀な戦線の拡大を跡づけるように、連合国によるＢ・Ｃ級戦犯の軍事法廷は、中国をはじめインドシナ半島など世界４９箇所に開設され、検挙者総数の約１割、千人がそれぞれの場所で死刑に処せられた。その数年後、未決または有期刑の人々等約６千人が世界中から集められ、東京巣鴨プリズンに収監された。Ｂ・Ｃ級戦犯は、その多くは上からの命令によって行われた実行行為が、「戦争犯罪」・「人道に対する罪」としてそれぞれ問われたものであった。

敗戦直後の緊張が徐々に溶け、一方、米ソの対立する冷戦へと世界が堕落していく戦前回帰の「逆流」は、巣鴨プリズンでは受刑者にラジオ聴取が許されるという形で現れたらしい。そしてそのラジオから１９５０年１月１日、マッカーサーによる日本政府への再軍備要請が発表されたのである。そういえば、その１週間前の１２月２５日、同じ最高司令官から戦犯の一律減刑が発表されてもいた。上述の「頂門の一針」とはこの時点のことである。ラジオの伝えるところによれば、再軍備によって発足した警察予備隊の幹部は、かつて無益な作戦命令を机上から発した帝国軍人の指導者たちばかりであった。Ｂ・Ｃ級戦犯は彼らの命令に従ったがゆえに罪に問われ、死刑に処せられ、獄死し、２０年もの間こうして獄舎につながれていたのである。

日常では変化の見えにくい歴史だが、このようにはっきりと見える切り通しのような瞬間がある。この瞬間を確実に押えておかないと、今のこの国のようなインモラルのはびこる世界が出現する。心したいものだ。